

春の伝道礼拝第1回(5月17日)

移り揺らぐことのない愛

小海 基



イザヤ書

54章4～10節

ローマの信徒への手紙 3章29～31節

5月の伝道礼拝のテーマは「愛」です。

「神は愛なり」(ヨハネ4・16)と聖書に書かれていることは誰もが知っていますが、この言葉がキリスト教の神の愛のイメージを歪めてしまっていると鋭く指摘したのが、児童文学『ナルニア国物語』の作者であるC・Sルイスです。

彼は愛の神と同時に「怖れ」を持つべき存在なのだ、子ども向けの作品の中でも繰り返し描いています。

『ナルニア国物語』の第一作である『ライオンと魔女』の中で、衣裳筆筒をくぐって人間界からやってきた少女ルーシーに、ビー

バー婦人がこう語りかけています。

「アスラン(ナルニア国の救世主)の前に、ひざがガタガタふるえずに出て行ける人がいたら、それは本当に勇気のある人か、さもなければ大ばか者」だと。

それを聞いてルーシーは思わず言ってしまうのです。「じゃあ、近よるのは安全じゃないって言うことね?」「安全です」とビーバーのだんな。「あんた、うちのかみさんのいう事をきいていなかったんですかい? だが安全だなんて言いました? 安全なんて、とんでもない。でも、善い方なんです。まったくの話、あの方は王さまなんですよ」

キリスト教信仰の世界を伝えようとしても日本社会は、「宗教は怖い」と、バリアを張ってしまう「宗教フォビア」の対応か、カルトでもなんでも飲み込んでしまう「無防備」の対応か、極端に二極化しがちです。でも「神の愛」を前にして本当に必要なことは、「怖れ(畏れ)」を同時に覚えること

です。教会は何とかしてそれを伝えようとしているのです。

神様という存在に気づくということが信仰を持つことです。

預言者イザヤは、それは、もはや恐れるものが無いということであり、地上のどんな力によっても恥をうけたり、うろたえさせられたり、辱められることは無いということだと言いつつ切られています。

イザヤ書54章は、第2イザヤの預言ですから南ユダ王国の民は、一度は国を失い、バビロニア帝国で70年近い奴隷の生活をし、捕囚の日々を送り、そこから神様によつて解放されてふるさとへ帰るという中で語られているのですから、なまじのメッセージではありません。

なるほど、これからも地上の生活の中ではノアの洪水に匹敵するような山々が移り、丘が揺らぐことが起こるかもしれません。再び国を失うことが起こるかもしれない(事実、A・D・70年にローマ帝国によつて国は滅ぶことになりました)。でも「神のいつくしみは

移らず、神の結ぶ平和の契約が揺らぐことはない」と預言者イザヤの弟子第2イザヤは明かします。

今日読んだ聖書のパウロの「ローマの信徒への手紙」はユダヤの国がローマによつて滅ぼされる時代に生きたパウロの言葉です。この確かな神様の愛が移り揺らがないことは、ユダヤ人にとつても、その敵となる異邦人にとつても決して変わらないのだと言い切られています。

パウロのように元国粋主義的なファリサイ派のユダヤ人から180度ひっくり返つてキリスト者となり、市民権を持つ身でありながらローマ皇帝によつて処刑される生涯を持ち、自分の死後、ローマによつてユダヤが滅ぼされるといふ、歴史的にも、地域的にも、民族的にも、引き裂かれ報われることがあまりに少ない生涯を送らざるを得なかった人であったとしても、その事実は揺らがなと言い切るのです。

さてドイツの大作曲家のJ・S・バッハの代表作は200曲(元

は300曲以上あった)の教会カンタータです。教会カンタータのうち少なくとも9曲の台本を書いたのが18世紀前半としては珍しいことですが、クリステイアン・マリアーネ・フォン・ツィーグラという女性です。バッハとほぼ同世代の女性であつたことは、もっと研究されても良いことだと思つていきます。ところがバッハの研究者はほとんどが男性ばかりで、バッハに影響を与え、バッハの教会カンタータまで変えた女性にはほとんど目を掛けていないのが現状です。

バッハ演奏家の女性で有名なの



バッハのカンタータのうち、少なくとも9曲の台本を書いたクリステイアン・マリアーネ・フォン・ツィーグラ

は、オルガニストのマリークレール・アランや、チェンバロ奏者ヴァイオリン奏者では何人かいるものの、女性指揮者では東京バッハ合唱団の大村恵美子先生くらいです。

クリステイアン・マリアーネ・フォン・ツィーグラという人は父親がライプツィヒ市長という名門の出で、ピッツランベルグ大学の哲学部が「帝国詩人」の称号を贈るほどの実力ある詩人でしたが、16歳で一回目の結婚をするも一年余りで夫に先立たれてしまいます。二人目の夫も約7年で先立たれてしまい、故郷のライプツィヒに帰ってそこでバッハと出会います。1725年4月22日〜5月27日の5週間でバッハのために9曲のカンタータの台本を書いたことが分かります。

そういう事情、環境を考慮した上でこのカンタータの歌詞を見ると、また違った感想も生まれてくるかも知れません。

ちなみに、ツィーグラは、1741年に3度目の結婚をした

後は創作活動を行なっていないので、これらの作品群は未亡人という立場だからこそ生まれ得たものなのかも知れません。もし彼女に2度の夫との死別がなかったらライプツィヒに帰ってくることもなく、これらのカンタータも存在しなかったことを思うと、歴史の因果を感じます。

そんなツィーグラの手によるカンタータの台本はしばしば聖書の直接引用を行うことが特徴で、しかも彼女はヨハネによる福音書が好きで直接引用します。

しかも当時は、朗読箇所はその日ごとに厳格に定められているはずで、それを拡大して引用するのは当時としてはかなり大胆な試みです。こういうことも含め、今日の音楽学者の中にはツィーグラの詞に対して「冗長で未熟」と厳しい評価を下す向きもありますが、信仰を表す真摯な心はむしろ強く伝わってくるようにも感じられます。そうまでしてでも伝えたいメッセージがあつたのだと、それがバッハを強く動かしたことを9曲のカンタータを聞くとと思わ

されます。

バッハは彼女の台本でカンタータの作曲を変えるのです。マリアーネ・フォン・ツィーグラのカンタータ歌詞は、わずかな例外を除いて、冒頭だけでなく曲の中央にも聖書の言葉をもっているのが特徴です。彼女の歌詞に作曲するに際してバッハは新しい道を進みます。

それまで聖書の言葉はコラールや合唱、レシタティーボの形で処理されていたのが、バッハは新しい楽曲形態を探索し始めます。マリアーネ・フォン・ツィーグラのカンタータに見られる短い聖句曲は、バッハの楽章のなかでも最も見事なものに数えられます。

移り揺らぐことのない神の愛の表現なのです。

私たちも神様の愛のまなざしに目を向けて揺らぐことがないようにと祈ります。

(出席26名。文責・編集委員会。要約担当・菅野静恵)